

地誌叙述に関する一試論

—イギリス地誌・歴史的背景を事例として—

岩崎公弥

地域社会システム講座

An essay on description of regional geography

—An example study of “Historical background; Regional Geography of Britain”—

Kimiya IWASAKI

Department of Regional and Social Systems, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1 はじめに

本論では、前稿に引き続き、イギリスの地誌的叙述を試みる。そこでも触れたように、現在のイギリスという地域をつくりあげてきた地域形成の過程や発展過程を考察する。歴史的背景は現在の地域形成を述べるにあたって欠かせない項目と考える。「地誌学は歴史的地誌学の立場をとることが有効」という大嶽(1989)の指摘にもあるように、今日の世界や地域の情勢を生み出した根源は、それまでの歴史的経過の中に存在する。ただ、地域の歴史を網羅して述べることはたして地誌的叙述にどこまで必要であるかの判断は必要である。それはあくまで今日のイギリスという地域の特色の形成に深く関わっていると判断される歴史的事象について取り上げることが重要と考える。そのような意味で、かつてR. ハーツホーン(1974)がその著『地理学方法論』の中で述べた次の内容が注目される。

「地域地理学者がその現在についての研究を提出する前に、過去の一つまたはそれ以上の時期の、その地域についての歴史地理の研究をするように勧めようという、さらに進んだ考え方がある。ある地域の地理は、人が現在の状態から推してこうであろうと考えるところとは非常に相異しており、おそらくはかなり恒久性のある条件の終始変ることのない発達によるよりは、むしろ過去のある特定の時期の地理によって多分に決定されているので、その特定の時期の地理がまず以て描き出されるならば、現在の地理がもっとも容易に理解されうる場合がある。」

つまり、地誌学における歴史的叙述は、現在の地域の地理的状态を現出させるにあたって直接的に作用したと思われる時代の地理を描く必要があると思われる。筆者がイギリス地誌を叙述するにあたって、重要であると考えた要素の一つは、イギリスという国や民族の成り立ちであり、これらの要素は今日のイギリスの地域性を反映していると考えたからである。イギリ

スは、その国名にも反映されているように「連合王国」である。人によっては、「イギリスには4つの国がある」と言うように、民族を異にする地域が存在する。どのような過程を経て、異なる民族が統一国家へと編成されたのか、統一された国家イギリスの世界的な地位はどのように変化したのか、という観点からイギリスの歴史的背景を述べていきたい。

次に地誌において歴史的背景を叙述するに当たって、重視すべき点としては、政治史である。政治史は権力の興亡をめぐる歴史がその中心となっている。時間の流れに沿って支配層の交替を叙述することは、その国の歴史を理解する上でもっとも時代変化を追いやすい事項と考えたからである。それに伴って、経済史や社会史を絡めながら叙述するとより効果的であると思われる。その際、歴史的出来事が何らかの形で現在の地域に刻印されているならば、それにできる限り触れることで、現在へのつながりを意識づけることが可能である。その意味では各地に残る遺跡・遺物・古地名などは、今日のわたしたちに過去を直接・間接に伝えてくれる重要な要素である。「過去の歴史に触れる」という経験は、歴史的出来事をより身近に感じ、時には歴史の登場人物に共感する契機ともなるであろう。

今日学校教育においては、地理と歴史とは別個の科目として教えられている。高等学校の教員免許では「地理・歴史」がひとつくりの免許状となっているが、教科としては別である。これは果たして効果的な社会の学習と言えるだろうか。ある部分、地理と歴史とを結びつける部分を設けた方がより効果的な学習に結びつくのではなからうか。地理と歴史を結びつける、あるいは融合したものとして地誌を考えることができる。ある国や地域を理解するに当たって、その国や地域の歴史についての理解抜きにできないし、地理的知識も同様である。学習対象によっては、いわば歴史地誌学的方法を学校教育の中に取り入れていくことが必要と思われる。

本稿で示したイギリスの歴史地誌は、その試みでもある。現在のイギリスの地誌を理解するために必要な歴史的背景を叙述するという観点から、歴史的背景が今日の地域的特色にどのように反映されているかを叙述することに意を用いた。

2 地誌—イギリスの略史—の内容と叙述意図

II イギリスの略史

1 ケルト人の渡来とローマ支配

イギリス南部ウィルトシャーのソールズベリー平野の中央に存在する謎の巨石記念物にストーンヘンジ Stonehenge やエイヴリー Avebury がある。この遺跡の築造時期は、BC2800～BC1100年頃までと推定されており、これらは新石器時代から青銅器時代にかけて、巨石文化を有する大陸から渡来し、水はけの良いチョーク丘陵地に居住した人々によってもたらされたものと考えられている。このような巨石を用いた環状列石遺跡は、ソールズベリーのみならず、イギリス各地に点在している。例えば北部のオークニー諸島には、環状に石が配置された二つのストーン・サークル（ステネスとブロードガー）遺跡が存在する。謎を秘めた遺跡であるだけに観光資源ともなっている。

BC500年前後に大陸からケルト人が渡来し、鉄器を伝え各地で開墾や城の建設なども行った。彼らは水辺の土地に木の杭を用いた骨組みの上に草や泥炭で覆った小屋に住んでいた。大陸からの交易者たちは河川を玄関口としたことに由来するのであろうか、イギリスの河川名の約3分の2はケルト語に由来すると言われる¹⁾。例えばエイヴォン川の Avon は古いケルト語で「川」そのものを、テムズ川の Thames は「黒ずんだ色の川」を、トレント川の Trent は「侵入者」をそれぞれ意味すると言われている。アメリカの河川名が先住民であるインディアンの言葉に起源していることと似ている。ケルト人の伝えたものの中で重要なものが、キリスト教である。キリスト教がイギリスに初めてもたらされたのは、2～3世紀とされているが、これは古代ケルト人の地であったガリア地方（今日の北イタリアからアルプス北西部一帯）からもたらされた。

ケルト人渡来の最後のものが、ベルガエ人で、彼らはローマ人によってブリタニ人 *Britanni*（英語名 *Britons* ブリトン人）と呼ばれたことから、イギリスはブリタニア *Britannia* と呼ばれるようになった。ケルト語で戦士を意味するベルガエ (*Belgae*) は、ローマ軍司令官カエサルが「ガリア戦記」の中で記したように勇敢な部族として知られている。そしてこのベルガエが今日のベル

ギーという国名の語源となったとされる。

ケルト人のブリテン島への移住は、今日のイギリスの民族分布の基盤と考えることができる。後述するように、その後もイギリスには異なる様々な民族が侵入あるいは移住してくる。またケルト民族の分布は、今日のウェールズやスコットランド、アイルランドにまたがるが、フランスのブルターニュ半島にも分布している。そのためブルターニュ地方のブリタニー語とウェールズ語とはよく似ており、両地域の人々の間ではお互い言葉が通じるという。まさに言語は民族間の繋がりを証明する要素である。

イギリスを意味するブリテンの起源についても触れた。地誌において、その地がなぜそのように呼ばれるようになったのか、といういわゆる地名の起源、語源に言及することは非常に重要である。それは地名がその土地の性格や歴史を表しているからである。

ローマ人による本格的なイギリス支配は、紀元後に開始されるが、やがてブリタニアはローマの属州（プロウインキア）となる。特に2世紀初期には、タイン川下流のニューカッスルから西部のソルウェー湾口のカーライルにかけてハドリアヌス帝の長壁が築かれ、北辺の警備と関税の徴発を行った。さらに2世紀の中期にはその北方にアントニウス・ピアス帝の長壁が築かれた。

当時、ローマ人によるブリタニア支配根拠地の中心が、テムズ川下流の渡河地点に築かれた都市ロンディニウム *Londinium*（今日のロンドンの起源）であり、ブリタニアの道路網の中心となっていた。各地にローマ風の建築物が築かれるとともに、道路や橋の整備も進められたが、4世紀にはいると大陸からのゲルマン民族の侵入によってローマ人による支配は後退し、5世紀初めには、ついにローマ軍はブリタニアから撤退した。

現在イギリス各地にこのローマ支配時代の遺跡が残っている。本文に示した2つの長壁は、ケルト人の来襲からイングランドを防衛することと徴税を目的としたものであるが、ローマ人が残したものはこのような城壁と道路程度で、ローマの支配は支配拠点とした都市と都市とを結んだ拠点的な支配であって、特にブリテン島の南部を中心としており、ブリテン島の北部や内部にまで面的に及ぶことはなかった。今日ローマ支配時代の拠点都市であった町として、交通上の要地であったロンドンの他、支配拠点として城の築かれたコルチェスター、ヨーク、チェスターなどをあげることができる。

2 アングロ・サクソン人の渡来とイングランド統一

4世紀以降の中央アジアの遊牧民であるフン族の西進によって、ゲルマン民族の大移動が引き起こされ、その一民族であるアングロ人、サクソン人などがブリタニアへ侵入した。彼らは5世紀末には、各所に小さな部族国家をつくり、土地の共同所有を原則とする階層的社会を形成していた²⁾。

アングロ・サクソン人が渡来した5世紀から彼らによってイングランドが統一された9世紀頃までは、ヘプターキー（七王国）時代と呼ばれている。これらの七王国を統一したのは、南部に勢力を持っているウェセックス王国であった³⁾。しかしこの頃より既にデーン人（ヴァイキング）の侵入が激化して、北東部イングランドの約3分の1の地域に彼らの定住を見た。

10世紀末から再びデーン人の侵入が激しくなり、ついにデンマーク王クヌードが、アシンドンでエドマンド2世を破り、イングランド王位（在位1016-35）についた。これをデーン朝と呼ぶ。デーン朝はわずか3代で絶えた。その後大陸のノルマンディー公ウィリアムがイングランド王位を譲られることとなり⁴⁾、これに反対するイングランド国内の貴族との間で戦争となった。結局1066年のヘイスティンガスの戦いで、イングランド側はウィリアムに破れ、ここにノルマン朝が開かれることとなった⁵⁾。これ以後イングランドは異民族王朝の支配を受けることとなった。

ローマ人の撤退後に始まるアングロサクソン民族によるイギリス統治は、今日のイギリス民族構成の基盤となっている。その意味で、5世紀以降のイギリスの政治史は、先住のケルト系民族であるブリトン人を西方や北方に追いやる形で進入したアングロサクソン民族を基幹的民族としながら、その後の他民族による支配や統治を受けた形で展開されることとなる。地誌において民族史を叙述するに際して、現在を構成している民族的起源に触れることが最も重要であろう。もちろん今日のイギリスを構成する民族がアングロサクソン民族にのみ限られるわけではない。その先住民族としてのケルト系民族もあれば、その後のノルマン人などの民族の流入もあった。植民地獲得後はこれら世界各地の植民地から流入した民族も少なくない。とりわけ、インドなどの南アジア、中近東、カリブ海諸国、アフリカなどからの移民が多く、現在イギリスの非白人の割合は5%を超えている。

3 中世封建社会の成立

ノルマン朝初代王であるウィリアム1世（征服王、在位1066-87）は、イングランド各地に軍役を課して封建制を確立していった。ウィリアムは国政の要職者をすべてフランスから連れてきた。以後数世紀にわたって、フランス語が支配者階級の言葉として広まったため、この間に英語に多くのフランス語の語彙が入ったとされる。また有名な「ドゥームズデー・ブック」の編纂にみられるように強力な中央集権制を推進した。これによるこの中世初期における重要な変化としては、人口増加、農具の改善と技術的發展、経済的拡大などが起こった⁶⁾。彼の死後王位継承争いが起こり内乱が発生したが、ヘンリー2世によってイングランドの再統一がなされた⁷⁾。彼は結婚などによってフランスの西半部の支配も行うに至り、ここにアンジュー帝国と呼ばれる広大な支配を実現した。しかし、プランタジネット朝3代目のジョン王は、大陸の領土経営に失敗して領土を失った上に⁸⁾、1209年にはカンタベリー大司教就任をめぐって、ローマのインノケンティウス教皇に破門された。これらのことをもととして、貴族から1215年に王権の制限を盛り込んだ「マグナ・カルタ」（大憲章）の承認を強制された⁹⁾。その後13、14世紀のイングランドの国内統治は、マグナ・カルタをめぐって展開された。

ノルマン王朝がイギリスにもたらした最大の影響は、ヨーロッパ大陸において展開されていた封建制を持ち込んだことであろう。特にウィリアム1世のもとで徴税を目的として全国にわたって作成された土地調査簿「ドゥームズデー・ブック」は、イギリス中世の歴史地理的資料として活用されてきたことはいまでもない。マグナ・カルタの承認に至る経緯は、ジョン王が自分の顧問となっていたノリッジの司教をカンタベリー大司教に任じようとして、ローマ教皇の友人でもあったS.ラングトンの選任に異議を唱えたことから、ローマ教皇と衝突することになった。これを機に国際的にも著名な枢機卿であり神学者でもあったS.ラングトンは、ジョン王の暴政に反発をし、既得権を守るべく立ち上がった諸侯とジョン王との仲介人となり、諸侯と協定が結ばれなければ内乱が起こるとして王を説得した結果、マグナ・カルタと呼ばれる諸侯への王の勅許状が作成されることとなったのである。マグナ・カルタは土着のイングランド貴族が、国王権限に制限を加えるべく国王に認めさせたものであり、これは後に議会と王権との関係を決定づけることとなった。マグナ・カルタの復原物がお土産物としても売られている。

ヘンリー二世統治の頃から既にイングランドの勢力下に置かれていたウェールズにおいては、エドワードI世のもとで、さらに強力な支配を受けることとなった。1301年にはエドワードI世の皇太子をプリンス・オブ・ウェールズとし、スコットランドでもベイリアル王 John Balliol (在位1292-96)を立てて臣従させている。この頃には、生産力の増大に伴って各地に商工業都市や地方市場が発達し、都市においては有力な商工業者がギルドを結成した。

14世紀に入りイギリスとフランスとの間で、大陸にあるガスコーニュ領有をめぐる問題に端を発した争いが起き¹⁰⁾、フランス王シャルルIV世の妹であったイギリス王妃イサベラの皇太子エドワード三世(在位1327-77)が、フランス王フィリップVI世と対立し、彼はフランス王位継承権を主張して1337年には百年戦争(1337~1453年)が始まった。

ヨーロッパでは14世紀中頃から黒死病(ペスト)が流行し、人口が減少した。イギリスでは全国民のほぼ半数が死亡したと推測されている。死因の全てが黒死病によるものではないが、人口の激減は社会に大きな変化をもたらした。たとえば、農園では労働力不足が起こった。小作人の多くが裕福な自作農となった。同世紀末には人頭税に反対して蜂起したワットタイラーに率いられた農民一揆が南東イングランドで起こった。

この頃には都市の古いギルド規制から逃れて、農村において毛織物工業が進展し、ギルドの生産と競争するようになっていった。このような農村工業の発展は、農民の経済的地位を高めるものもなった。

1453年にはフランスとの百年戦争が終結し、英国軍はボルドーから引き揚げた。しかし間もなく1455年にバラ戦争が起こり¹¹⁾、やがてヨーク朝が開始された。ヨーク朝は22年ほどで終了しヘンリーVII世がチューダー朝を開いた。

14世紀に入りウェールズがイングランドに征服されるが、その過程で、ウェールズ北部には征服者エドワードI世によって建設された城塞が残っている。コンウェイ、カナーボン、ハーレックなどの複数の城は、ウェールズ人を取り囲むまさに「城塞の輪」をなしている(田辺, 1998)。今やこれらは観光遺産ともなっているが、現在のウェールズ人はどのような気持ちでこの遺跡を見ているのであろうか。

百年戦争は、イングランド人の愛国心を高めることとなり、それまで支配者の言葉であったフランス語は衰退し、英仏分離の傾向を促進する契機となった。ま

た黒死病によって自作農が多く誕生した結果、農民や商人・職人の力が増し、庶民の言語であった英語がその後イギリスの言語として復権することとなった(橋口, 2003)。

4 絶対王制と市民革命

ヘンリーVII世に始まるチューダー朝では、強大な王権を生み出すべく絶対主義の基礎が固められていった。当時国内では農村での毛織物工業の発展によって、農業生産部門の中心が穀物から羊毛生産に移行したり、穀物生産の合理化が図られ、農地を大きく囲い込む第一次囲い込み運動が展開された。

ヘンリーVII世の息子ヘンリーVIII世は、離婚をめぐるローマ教皇との論争の後、1533年にカトリック教会と決別し自らをイギリス国教会の首長であるとして、イギリス各地の修道院の解散を断行した¹²⁾。アイルランドにも教皇権の廃止を強制し、またスコットランドを攻撃した。エリザベスI世(1533-1603)の治世には、イギリス国教会が確立し、対外的にはスペインによる海からの進入を阻止し¹³⁾、またアメリカ大陸には植民地が形成された。

16世紀における宗教改革のうち、ヘンリーVIII世が行ったものの一つに、修道院の解散があげられる。修道院はローマ教皇に直属する組織であるため、国王の権限が及ばぬものであった。そこで1536年に法律によって、小修道院を閉鎖し財産の没収、修道士の追放などを行った。現在イギリス各地に残る廃墟化した修道院の多くが、この時期に廃止されたものである。

エリザベスの後を承けたのは、スコットランド王ジェームスVI世で、彼はイングランド王を兼ねてスチュアート朝を開いた。ジェームスVI世改めジェームスI世の治世下で、アイルランドのアルスターへの植民が開始され、カトリックの土地に多くの新教徒(プロテスタント)が移り住み、今日まで続いている北アイルランド問題の端緒がここにつくられた。

内政的には王権と議会・国民との対立が激化し、1628年議会在「権利請願」を提出し、これに反対した王権との間の対立がこじれてピューリタン革命(1640年)が起こった。これは議会派が勝利して1649年にチャールズI世は処刑された。その後クロムウェルによる独裁的な政治が始まった。クロムウェルの病没後、1660年に亡命先からチャールズII世を迎えて王政復古が実現した。チャールズII世に続いてその弟のジェームズII世が王位について、専制支配とカトリックを強要し

たため、名誉革命が起り、王は1688年に追放された。ここにイギリスは世界に先駆けて議会政治体制の基礎が据えられ、1707年にはイングランドとスコットランドが正式に統一された。

ジェームズⅡ世の後を承けた長女のメアリーと夫君のオランダのオレンジ公ウィリアムが共同統治者として王位に就くが、この出来事は、議会在王位継承者を決めた最初のものとなった。その後は議会在国政を行う存在となり、近代イギリス内閣制の基礎がここに定まった。したがってイギリスの議会制の歴史は、300年以上の歴史を有していることとなる。

5 産業革命と大英帝国の成立

18世紀に入るとハノーバー朝が開かれ、第3代のジョージⅢ世（在位1760-1820）の時代には産業革命が進展した。また1775年にはアメリカの植民地が本国であるイギリスに反旗を掲げ独立戦争が起り、1783年にアメリカ13州の独立が達成された。

産業革命を基礎として、やがてヴィクトリア女王の時代（在位1837-1901）に入ると、イギリスはその卓越した工業力でもって世界各地に植民地を獲得し¹⁴⁾、世界の陸地の4分の1を占めるに至った。ここに大英帝国が築かれたのである。1851年にロンドンで開催された世界初の万国博覧会は「世界の工場」と言われたイギリス繁栄の象徴的出来事でもあった。20世紀に入りイギリスを始め多くの帝国主義国家間の対立が深まり、1914年ついに第一次世界大戦が起こった。戦後イギリスの経済力は低下し、世界金融の中心はロンドンからニューヨークに移った。イギリスでは1922年に南アイルランドが独立して、アイルランド自由国が成立する一方、北アイルランドはイギリスに残ることとなった。第二次世界大戦後には、イギリスの国際的地位は益々低下し、多くの植民地がイギリスからの独立を果たしていった。特にイギリスの国際的地位の低下を世界に印象づけたのは、1956年に起こったスエズ紛争であった¹⁵⁾。

「古き良きイギリス」と呼ばれる時代として、このヴィクトリア期のイギリスをあげる人が多い。正にこの時期はイギリスが世界のリーダーとして君臨し輝いていた繁栄の絶頂期といえよう。但し国家の繁栄の陰で、1840年代は飢餓の時代とされるように、低賃金と食糧の値上がりなどで庶民のくらしは苦しいものであった。第一次世界大戦はイギリスを中心とする連合国側の勝利で終わったものの、多くの若者が犠牲となった。イギリス社会では第二次世界大戦よりも第一次世界大戦の方が大きな意味があると言われる。それ

は、ヴィクトリア朝風の生活の終焉とともに新しい価値観と生活様式をもたらす出来事となったからである（近藤・細川、2003）。アイルランドでは国民の多くが、カトリック教徒（94%）で、第一公用語がケルト系言語であるアイルランド語（ゲール語）、第二公用語は英語となっており、使用者が5%ほどしかないケルト系言語を第一公用語に定めている点からもイギリスに対する抵抗意識が表れている。1960年代以降には、アイルランドの独立に際してイギリスにとどまった北アイルランドでは、イギリスにとどまろうとする多数派のプロテスタント教徒とアイルランドとの合併を望む少数派のカトリック教徒の間で衝突が多くなった。イギリスで the Troubles と言えば「北アイルランド問題」を指すと言われるほどに、時々テロの悲劇に見舞われている。

イギリスは独自の立場でヨーロッパにおける経済的・政治的主導権を得るべく、1960年に EFTA（ヨーロッパ自由貿易連合）を組織し、EEC（ヨーロッパ経済共同体）に対抗しようとした。しかし1960年代以降のいわゆる「イギリス病」と呼ばれた経済の悪化によって、イギリス自らが EFTA からの脱会を行い、1973年に EC（ヨーロッパ共同体、現在の EU）へ加盟をした。これら一連の動きは、それまでヨーロッパ大陸とは一線を画してきたイギリスが、その伝統を捨てて大陸と一体化しようとする姿を示しているといえよう。1994年5月に完成したユーロトンネルはイギリスと大陸との結びつきを一層強めるものと期待されている。

第二次世界大戦後のイギリスの国際的地位は戦前とは大きく変化した。さらにヨーロッパ内部においてもその相対的地位は低下した。その様な中でイギリスは、紆余曲折を経ながら統合ヨーロッパの一員となった。イギリスの EC 加盟は政策の大転換であり、それまでの旧植民地や保護領との特惠関税などの大英帝国時代の遺産を捨てざるを得ないことを意味するものであった。

地誌の注

- 1) C. Stella Davies and John Levitt (1970): "What's in a Name?", Routledge & Kegan Paul, 108p.
- 2) 共同体を構成する基幹的階層はチェオルル ceorl と呼ばれる一般自由民で、大家族を構成して、それぞれハイド hide という分配地を有していた。一部には貴族階級も見られ貴族や一般自由民の中に、奴隷の身分の人々がいた（小学館『日本大百科全書』）。
- 3) エグバート（エグベルト）王（在位802-839）が、マーシア、ノーザンブリアを破ってアングロ・サクソン諸部族国家をイングランドとして統一し、彼が今日のイギリス王家最初の国王と見なされている。

- 4) アングロ・サクソンの王エドワード懺悔王が後継者に恵まれなかったため、ウィリアムにイングランド王を譲る約束をした。
- 5) いわゆるノルマン・コンクエストである。
- 6) B.M.S. Campbell (1990) : People and Land in the middle age, 1066-1500, R.A. Dodgshon & R.A. Butlin (ed) "An historical geography of England and Wales" pp. 69-121.
- 7) プランタジネット朝(1154~1399)の始まりである。
- 8) このためジョン王は、欠地王とも呼ばれている。
- 9) マグナ・カルタ Magna Carta は、63ヶ条に及ぶもので不当な上納金に対する反対、非合法的な逮捕の禁止、適正な裁判、商人の保護などを要求しており、国王も法の下にあるという原則を確立した重要な文書で、王と貴族との封建的主従関係の原則を規定したものである(小学館『日本大百科全書』)。
- 10) ガスコーニュはフランス南西部のピレネー山脈とガロンヌ川との間にある土地で、1259年のパリ協約でフランス王の封土としてのイギリス国王領とされ、百年戦争の戦場となったところである。
- 11) バラ戦争は、王位継承をめぐるイギリス内の争いで、1455~85年まで続いた。ランカスター王家とヨーク王家の間で争われ、前者が赤バラ、後者が白バラを記章としたことによる。
- 12) 今日イギリス各地に残る廃墟と化した修道院の多くは、この時に破壊されたものである。
- 13) スペインの無敵艦隊「アマルダ」をドレイク船長らの活躍で打ち破り勝利した(1588年)。
- 14) 既に獲得していたカナダ、西インド諸島、インド、オーストラリア、ニュージーランドに加え、アフリカと東南アジアを領有した。
- 15) イギリスはスエズ運河の戦略的価値(ロンドンからスリランカ間の距離はケープタウン経由に比べて7000kmも短縮)に着目し、運河の支配権を握った。しかし1956年エジプトのナセル大統領は同運河の国有化を宣言したため、イギリスとの間に戦争を引き起こした(スエ

ズ紛争)。イギリスはアメリカとソ連の干渉に屈してスエズより撤兵を行った。

3 おわりに

本稿は、イギリス地誌—歴史—の叙述とその意図について述べたものである。現在の地域を理解するために過去の歴史を知ることは不可欠と考えたからである。あくまでも現在のイギリスを理解するための一助と位置づけて、略史形式をとっている。政治史を中心として民族の形成や社会経済の変化を見ることを主眼として叙述を行った。イギリスを構成するイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドなどの政治史や民族史を知らずして、今日のイギリスという国の実態を理解することはできない。またそれなしではユニオンジャックの由来もわからない。

今回の試論を通じて感じたことは、地誌における歴史的背景についての叙述は欠かせないものであり、学校教育における歴史学習と地理(地誌)学習との融合化を図ることも重要ではないかと考える。

本文文献

- 大嶽幸彦：『地誌学研究法序説』，大明堂，1989年，p.105。
 近藤久雄・細川祐子編著：『イギリスを知るための65章』，明石書店，2003年，p.299。
 田辺裕編：『図説大百科 世界の地理7 イギリス・アイルランド』，朝倉書店，1998年，p.881。
 橋口稔編：『イギリス文化事典』，大修館書店，2003年，p.23。
 R. ハーツホーン，野村正七訳：『地理学方法論』，朝倉書店，1974年，p.208。

(平成18年9月19日受理)